



小説 089タロー
挿絵 SAIPACo.

DE **デキる妹は** KI IMO!
いかがですか?

子作り
特別法!

序章	い妹たち	006
一章	大きくなった妹たち	011
二章	大好きだからオシリでね♥	052
三章	『新・子作り特別法』制定！	093
四章	妹たちの本音	142
五章	妹たちは渡せない！	186
六章	妹たちとの子作り旅行	206
終章	これからも妹たちと……♥	249

登場人物紹介

おおたけかなみ
大嶽愛御

満臣の妹で命の双子の姉。明るく家庭的でおしとやかだが、熱が入ると周りが見えなくなっ
て大胆になることも。

おおたけみこと
大嶽命

愛御の双子の妹。Gカップを誇るグラマラスな快活娘。人目を気にせず兄にじゃれつき誘惑する小悪魔な一面もある。



SWIMWEAR
VER.



おおたけみつおみ
大嶽満臣

妹たちを事故から庇って昏睡状態に陥った少年。五年後に目覚めて、美しく成長した妹たちに戸惑う日々を送ることに。

UNDERWEAR
VER.



「はあ、はあ……うふふ、大丈夫です、お兄ちゃん」

余韻にまだ震えながら、愛御が火照った顔で微笑む。

「やつと……やつとお兄ちゃんに、女の子として認めてもらえて。ずっと信じて……愛して待っていた甲斐がありました」

そう言つて彼女はちゅつ、と軽くキスをして、また照れたように微笑んだ。

兄の腕をやりわりと退けると、膝立ちのまま、パジャマのボトムに手をかける。

「お兄ちゃん……お願いです、このまま……」

スルリと下りていくボトムを見て、満臣はゴクツと喉を鳴らした。

もう聞かなくても分かる。愛御は最後までしてもらおうと思つている。

ブラとお揃いのレース入りの純白のショーツ。その最後の一枚もそつと下ろして、愛御は切なげに言う。

「お兄ちゃん、愛御に……して、ください。初めてだけど、強くして構いません。大好きなお兄ちゃんになら、滅茶苦茶にされたつて……避妊抜きだつて構いません」

「ツツ、愛御……!!」

あらわになつたデルタ地帯に、満臣は視線が釘付けになる。

部屋は薄暗いが、ふわりと繁つた薄い恥毛が確かに見えた。髪と同じ栗色のそれは、湿り気を帯びて窓からの月明かりに光っている。豊かな臀部はどっしりとしていて肉感的で艶めかしく、セックスしたときの快い弾力を想像させた。

両腕と首元の、脱げかけのブラとパジャマがまた、なんとも扇情的で淫欲を誘う。これが妹でなければ、あるいは妹だと知らなければ、間違ひなくむしろぶりついていただろう。「ツツ——だめだ。愛御……それだけは。僕らは兄妹なんだから」

それでも満臣は、搾り出すような声で言った。

「すごく……魅力的だつて思うよ。もう子供扱いなんてできない。でもそれだけは、ね？」ここで踏み止まらねば、誰より自分が止まれなくなる。その確信があった。

賢い愛御は、兄のそんな心中を察したように寂しげに笑った。

「……じゃあ……それじゃあ、こつちで、お願いします。せめてこつちで……」

彼女はそう言つて背中を向けると、ベッドの上で四つんばいになり、むき出しのヒップをこちらに向けてきた。

「おつ、お尻、なら……こつちなら、赤ちゃんもデキませんから。お願いですお兄ちゃん、愛してますから……本気だから、お尻だけでも愛してください」

「あつ、あたしもお願い。ほんとはパージンあげたいけど、おにいがいうんなら……お尻で我慢するから……」

命もまた、ボトムとショーツを脱いで捨てると、パンと張りのある丸いヒップを愛御の隣に並べてきた。

(二人とも、そこまでお兄ちゃんと……)

もちろん迷つた。これだつて一つのセックスなのだから。

けれど、そうまでして結ばれたがる一途で魅力的な妹たちを、満臣はもう拒めなかった。「ッッ——分かった。お尻でなら……」

本当は今にも射精しそうなくらいだった。寝間着のズボンの中では、とつくに肉棒がいきり立つて感度をマックスまであげていた。

アナルであることを唯一の免罪符にして、満臣は肉棒を露出させる。

「じゃあ、愛御から……いい、入れる、よ？」

「はい。ああ、お兄ちゃん……」

愛御は切なげな声を漏らし、軽くお尻を後ろに突き出す。

「すごい……おにいの、お、おつきい。こうやって見ると、すごいんだね……」

握ったこともある命だったが、改めて見て驚いていた。

実際、瘦身そうしんな見た目に反して彼のものは立派だった。太くて長い、包皮の剥けきった弧を描く勃起。未熟な色合いを除けば、雄々しいとさえ言えるほどだろう。

満臣は意を決して、いい？ と聞いてから愛御の豊かな尻たぶを掴む。

「ああ、どうぞ、お兄ちゃん……あつ、あああああつ……!!」

——ずぶつ、ぬりゆぬりゆぬりゆつ。

淫唇いんしんの上にある、小さなシワの集まりに、ゆつくりと肉棒が挿入された。

（ううっ！ すごい、ぬるぬるするっ！ これがお尻の中なのか……）

心配したほどキツくはなかったが、未体験の圧迫感がペニス全体を押し包んできた。

勃起神経に伝わってくるのは、想像以上に熱くて柔らかい粘っこく濡れた腸壁の感触と、まるで異物を揉み解すようなうねうねとした蠢きだった。

正直、驚きだった。お尻の中は思った以上に気持ちよくて、濡れた粘膜との摩擦感にすぐにも酔い痴れそうになる。奥の方は抵抗も強くはなく、なめらかな表面と程よくこすれて、えもいわれぬ甘美感が肉棒の芯を駆け抜けていった。

一方で入り口は、ひどく窮屈で絶えず圧迫感を伴った。そこだけがまるで食い締めるように、中の柔らかさと相反する刺激を味わえた。

「はあ、はあ、おっ、お兄、ちゃあん……！」

バックの姿勢で受け入れた愛御が、肩越しに振り向いてくる。

「どう、ですか……あうっ、愛御のお尻、気に入っていただけです、か……？」

「う、うん、すごくっ……くう、思った以上、だよ……！」

柔らかい中と狭い入り口、その同時刺激はみるみるうちに勃起神経を高めてくる。とつとつに興奮状態だったこともあり、気を抜けばすぐにも出そうだった。

喘ぐように兄が言うのと、愛御は少しだけ辛そうな表情に、柔らかな笑みを浮かべる。

「くす、嬉しい……だってお兄ちゃんと、こんな形でも繋がれたんですから」

青い瞳が、心底嬉しそうに細まった。

辛くないわけではないだろう。こんな経験、きつと初めてなはずだ。見れば額には汗珠が浮き、身体が少し強張っている。

それでも愛御はクスツと微笑み、そつとお尻を押しつけてくれる。

「愛御は、そんなに苦しくないですから……んっ、ああ……感じます、お兄ちゃんの熱いのを……それだけで愛御は、はあっ、し、幸せえ……」

意図せず少し間が開いたためか。愛御は緊張を解き、緩くだが腰を揺すり始める。

「ど、どうぞ、気持ちよくなってください。動いても、平気ですから……」

「う、うん。分かった。それじゃ……くっ、う、動く、よ……」

満臣もまた、快感に顔をしかめながら、少しずつ腰を揺すり始めた。

普通のセックスすら知らないため、完全に手探り状態だ。互いの動きもただどしくて、^{はため}傍目にはもどかしいくらいだろう。

それでも、筒状粘膜に擦られる刺激と動きに合わせてうねる感覚に、勃起神経は着実に痺れ射精感を高めていった。

「はあ……はああっ……すごい、お兄ちゃんを、お腹で感じますっ……お尻の中、広がって……太いの、入ってて……あっ、びくんってしました……う、嬉しい……!」

兄の昂りを感じるのか、愛御は恍惚のため息を漏らして幸せそうに腰を揺すった。

「ううっ、ますますこすれて、気持ちいいっ……! か、愛御は、大丈夫なのか? お兄ちゃんは、その……」

早いとは思いますが、あと少し加速したらすぐにも出そうな状態だった。たとえスローでも、この刺激は童貞には強すぎた。

「へ、平気です。お兄ちゃんさえ感じてくれれば、ああっ、愛御は幸せですからあ……！」
健気なことを口にしなから、まるで緩く波打つように愛御はお尻を揺すってくる。

「はあ、はああ、ああ、お兄ちゃんのおちんちん、愛御の中でびくんびくんとお……嬉し
い……あん素敵い……これがお兄ちゃん、これがおちんちんっ……」

心の底から幸せそうに、甘やかな吐息を漏らし始める愛御。

その献身的な、でも妙につやのある仕草を見て、満臣はなんとなく聞いてみる。

「はあはあ、愛御……ひよっとして、感じてる？　なんだかそう見えるんだ」
すると愛御は動きを止めて、まっ赤な顔で肩越しに見てくる。

「う、そんなこと……愛御、お兄ちゃんのためを思っただけ……」

「分かってる、愛御は優しい子だから。でも、僕より積極的に動いてる気が……それに、
ああっ、入り口がさつきより締まってきて、中も、なんだかうねうねと……！」

まるで緩くうねるように、腸壁が肉棒を摩擦してくる。さつきまでなかった新たな動き
に、勃起神経が急速に甘く痺れていく。

思わず勃起がビクンと跳ねると、愛御はあん、と可愛く鳴いてお尻を左右に軽く振った。
「愛御、なんか、気持ちよさそう……おにいのおちんちん、そんなにいいの？」

「はあ、はあ、そんな、命までえ……あん！　またびくんって、お兄ちゃんっ……！」
不安げに見守る命の目にさえ、感じているように映るらしい。

これは本当にそうなのかも。そう思った満臣は、試しに一つ、強めに腸壁の奥を突いた。

すると愛御は背筋を仰け反らせ、なんとも可愛らしい鳴き声をあげた。

「きゃんっつ!! だっ、だめですお兄ちゃん、それっ、愛御い……!!」

声はすっかり鼻にかかっつていて、苦しんでいる様子ではない。むしろどこか心地よさげで、濡れた粘膜もきゅっつと窄まり肉棒を甘やかに圧迫してきた。

その反応を見て確信した満臣は、お尻を掴んでいよいよ抽送ちゅうそうを激しくしていった。

「きゃんっ、はあああつ! だめえお兄ちゃんっ、こんなっ、お尻の中ぐりぐりいっ……削れちゃっ、あん削れちゃいますうっ!」

「ごめん、でも愛御のお尻の中、さっきよりぬるぬるしてきたっ。お尻もさっきより動いて……気持ちいいんだね? 感じてるよね?」

「いや、イジワルいわないでお兄ちゃんっ——はあだめえ! 激しいっ、はううんっ!」
——にゅぷにゅぷにゅぷにゅぷにゅぷはんぱんぱんぱん!

妹の甲高い嬌声きょうせいにつられて、兄の腰突きは勢いを増した。

たわわな尻肉をタップリと弾きつつ、少年は射精欲求に身を任せる。

(愛御も感じてくれるんだ。初めてののお尻でこんなによがるなんて!)

普段が真面目なぶん、ギャップに燃えた。命に比べれば引つ込み思案に見えるのに、いざとなると大胆になつて夢中になつて求めてくる。思いがけない反応は、男心を存分にくすぐってくれた。

「あああああつ、きゃんっ、だめえ! 形っ、変わっっちゃうう、お尻、お兄ちゃんのおち

んちん型にい……ああ悦んじやう、お尻燃えちやう、抉るのいいっ、ひいいんっ！」

愛御はいよいよ乱れ、細いくびれを振りながら快樂の涙を流している。動きに合わせて長い髪がふわっ、ふわっ、と大きく揺れて、汗に混じった発情臭を部屋一面に広げていく。安産型の大きな尻肉も突き込みにあわせてたぱんっ、と弾ける。アナルはより一層ぬかるみ、粘っこい腸液を隙間から漏らしていた。

そんな艶めかしい姿を見ながら、満臣は一気に射精感を滾らせる。

「はっはっはあつ、すごいよ愛御、こんなにしごかれるとお兄ちゃんもう、出ちやうよ！」
「はああ出してえ！ きてくださいお兄ちゃんっ、お尻なら平気です、中に、中にいっ！」

愛御はもう一度肩越しに振り向き、精一杯おねだりした。

その表情は——尻をトロンと蕩けさせ、大きく口を開けて喘ぐ淫らなもの。

普段とは打って変わったその官能的な喘ぎ顔に、満臣はさらに興奮して達していた。

「愛御っ——ああイクっ、出るよおっ！」

「ああっお兄ちゃんきてえ——あひっ、ひいいんくるうううっ！」

——どくうっ、どくどくどくどくううっ！

耐えに耐えた濃厚精液が妹の腸内にぶちまけられた。

その勢いと熱量は強烈で、敏感な肢体を腸内絶頂させるに十分だった。

「ひああくるう!! あんどくどくううっ、ぶきゅっぶきゅってえっ！ いいですこれえ、あつ幸せすぎて愛御っ、溶けちやうううっ！」



ふとそう思つて、満臣は思わず愉悅ゆえつの呻き声をあげていた。

「——愛御、命おつ……つて、あ、あれ……？」

自分の声に驚いて、満臣ははつと目を覚ました。

「はあ、はあ……ゆ、夢？　ここ、僕のベッド？」

ボーっとした頭でもすぐに分かった。見慣れた天井。月明かりの差し込む窓。夏の暑さを持つ、暗い自分の部屋。

正直、ほつとした。一息つくど、なんて夢を見たんだと恥ずかしくなった。

「溜まつてるのかな。この間アナルセックスしたつてのに……つて、う、うおおおつ!!」
夢精してないかと股間を見下ろして、満臣は仰天した。

「ちゅ、ちゅるっ……んふっ、おにい、やうつと起きたね。せつかく夜這いにきたのに、ずうつと寝たままなんだもん」

右側で四つんばいになった命が、むき出しの尻を舐めながら笑った。

「よっ、夜這いつて、なんでっ……!! わぁズボン脱げてる！」

「じゅる、くちゅ……もう、命ったら。お兄ちゃん困ってるじゃない」

同じく四つんばいの愛御が、左側から覗きこんでサオを舐めながら言う。

ベッドで仰向けに寝ていた満臣は、目が覚めると下半身むき出しで、左右から妹らに勃起ペニスを舐められていた。

（ゆ、夢じゃなかったっ!? いやにリアルな感觸だと思っただけ、道理でっ!）

眠気なんて一瞬で吹き飛んでいた。きつと快感だけは、現実のものだったのだろう。すっきり動転してしまう兄に、命は少しイジワルく笑う。

「おにいったら、フェラチオしても起きないどころか、夢の中で感じてるんだもん。まあ、相手があたしたちみたいだったから、ちよつと嬉しかったけどね〜?」

「そんな、バレててっ……それに、正夢……ああつ、命おっ……!」

夢の中身を口走っていたらしいと知り、満臣は堪らず赤面する。

「んふっ、けど寝ててくれてよかったかも。フェラしたいっていつてもおにい、きつとだめっていうし。あたしたちも、最初はちよつと緊張したもん……」

舌の腹でくびれを舐めつつ、命は照れ臭そうに言った。その丸い瞳には、まだ少しペニスへの怯えが残っているものの、感じて震える兄の姿に喜んででもいるようだった。

愛御も顔を横向きにすると、根元からゆつたりとサオを舐めあげていく。

「じゅる……愛御は、へ、平気です。だってお兄ちゃんのもの。ほかの人だったらぜつたい無理ですけど、お兄ちゃんのなら、いっぱい、んちゅっ……舐めてあげたいです」

「愛御、命、こんな、ほんとに……ああつ……!」

夢で味わった感覚が、現実としてペニスに広がっていく。じつとりと濡れた熱い柔肉、少しザラザラした快い刺激、それらがねつとりと吸い付いてきて勃起粘膜を這い回る。

その腰が砕けそうな快感の前に、満臣は身体を起こすことさえできず、そそり立つ肉棒

をウツトリと震わせてしまっていた。

(き、気持ちいいっ！ 舐められるって、こんな感じなのか……)

唇から伸びた赤い舌は、まるで別の生き物みたいに蠢きながら触れてくる。まだまだどたどしい、でも情熱的な舌の動きは、まるで肉棒に纏わりつくようで視覚的にも興奮した。

しかも二人は、フェラチオをしながらもどかしげに身体を揺すり始める。

「ちゅ、ちゅるっ……おにい、すごい硬いね……においも、んっ、濃厚って感じ……」

よく見れば二人ともバスタオル一枚の姿だった。風呂上がりなのか肌は普段よりしっとりとしていて、石鹸の香りがふんわりと鼻腔をくすぐってくる。

その裸に近い肢体を、命は小さくくねらせる。

「このカサんとこ、においすごい……嗅いでると、頭ぼーっとなっちゃう……」

くびれを舌先でペロペロと舐めながら、命は薄くまぶたを下ろす。月の光を映した瞳がうつすらと濡れて揺らめいていて、なぜだかとても妖艶に見えた。

「んじゅ、じゅるるっ、くちゅ……はああ、お兄ちゃんのおちんちん、びくんびくんして、

気持ちよさそう……ああ愛御も、なんだかあ……」

愛御はもつと妖艶で、横笛を吹くように舐める仕草が外見に反してエロかった。

「お兄ちゃん、ああ、お兄ちゃんの硬いおちんちんっ……美味しい、美味しいです……苦くて、ぴりっして、でも、ああ好き……!」

美味しいものでも舐めるように愛御は夢中で舐めてくる。唇周りが唾液で濡れても一向に

気にせず、快感で脈打つ血管たちに丁寧ていねいに舌を這わせていつてくれる。

その仕草は献身的で、大好きな兄への想いが表れている。と同時に、小さく漏れる熱っぽい吐息と少しトロンとした青い瞳が、陶醉とうずいしているようで艶めかしかった。

（二人とも、今夜は一段と綺麗で色っぽい……でもなんで？ なんで急に夜這いなんか）

アナルセックスのときでさえ、ここまでの強引さはなかった。あのときとは一味違う気配に、満臣は疑問を抱いた。

何かあるのだ。妹たちを大胆にさせる何かが。

その答えに行き着くより先に、命が身体を起こしてバスタオルの胸に指をかける。

「はあ……んふっ。おにい、今夜は……おっぱいでもしてあげるね。この前キモチよくしてくれたから、そのお礼……」

眉をハの字にして微笑むと、彼女はその細い指で、バスタオルの胸元を緩めた。

大きく前に膨らんだ胸元が、観音開きにそと開いていく。

——ぶるっ、たつぶんっ。

97センチGカップという見事すぎるおっぱいが、今夜も兄の前に差し出された。

（やっぱりすごいっ。ほんと、命のおっぱいって大きくて美味しそう）

なんとというか、純粹に男ウケするおっぱいだと思った。タップリとした二つの膨らみは、呼吸するだけでたぷんと揺れるほど柔らかくって瑞々みずみずしく、ぐっと突き出たロケット型が挑発的で色っぽかった。

命はバスタオルをシートに落とすと、生唾を飲む兄の股間にそのおっぱいを近づける。

「パイズリ……してあげちゃうよ？ 任せてよ、知識はばつちりあるんだから」

「愛御だつて、ば、パイズリくらい知ってます！ 胸だつて、は、88センチあるんですから。ちなみにEカップですっ！」

愛御もがばつと身を起こして、バスタオルに指を伸ばした。

兄を見て一瞬、躊躇ったものの、双子の妹に対抗するように観音開きで胸元を開く。

——ぶるんっ、ぼゆゆんっ。

（ううっ、愛御のおっぱいもやつぱり大きいっ。っていうかEカップなら十分すぎるだろ）
サイズを知ると、これまた興奮がいや増した。これだとアンダーが70以下なので、身長一六八を思えば巨乳な上に超スレンダーである。

そのお椀型の美しい乳房もまた、命の爆乳と向き合うように兄の勃起に押し当てられる。

「んふっ、いくよおにい。いっっぱい興奮してね？」

「お兄ちゃん、どうぞ味わってください。愛御の初めてのパイズリ……」

柔らかな微笑みを浮かべると、姉妹は揃ってたわわな膨らみを揺すり始めた。

「ああ……うう、これが、パイズリ……すごい、気持ちいい……！」

「んふっ、でしょ？ おっきなおっぱい好きな子って、みくんなコレしたがるんだって」
イタズラっぽく笑う命になにか言ってやりたかったが、そんな余裕は満臣にはない。

初めてのパイズリ感覚は、想像以上に柔らかくて、もちもちしていて、吸い付くような

肌の感触が堪らなく気持ちよかった。

（これ、愛御と命のおっぱい、同時に感じる。愛御のはぷりっぷりしてて、命のはもっちりしてるっ……！）

張りのある美しいEカップは、ぷるんとした弾力感が擦れる感触と相まって心地いい。片やロケット型のGカップは、柔らかかに歪んで包みこんできてこれまた非常に気持ちいい。双子なのに対照的な、張りのあるおっぱいと柔らかなおっぱい。その甲乙つけ難い素敵な感触に、勃起神経が急速に甘く痺れてくる。

「ああ、お兄ちゃん、おちんちん、びくびくしてます。気持ちいいんですね？」

愛御の問いに、満臣はうん、と頷いた。恥ずかしいが、思わず声が漏れるくらいに二人のバイブりは素敵だった。

「くすっ、嬉しい。じゃあ……本格的なの、いきますね？」

愛御は幸せそうにおっぱいを揺すりながら、目を閉じ口をモゴモゴさせた。

次いで薄く目を開けながら、舌を出し、溜めた唾液をトロオ……っと谷間に落とし込む。そして命と一緒に、おっぱいの動きを少し速くした。

「ううっ！ ヌルヌルしてきて……す、すごいっ、これ……！」

一際強い甘美感が勃起神経を駆け抜けていた。

ヌメリを帯びた四つの膨らみは、擦れるというよりも滑る感じで勃起粘膜を刺激してくる。スムーズな動きは乳揺れをよりダイナミックにして、まるで絡み合うようにして、そ

そり立つ肉棒を楽しませていった。

「はあ、はあ、んふっ、おにいに、おちんちんすっごい震えてる。そんなにキモチいい？」

谷間から突き出た震える亀頭を見て、命は火照った笑顔で言う。

「けど我慢してね。今夜は特別な夜だもん。ムダ撃ちはナシで、ね？」

そう言っつて谷間を覗きこむと、再び舌をチロリと伸ばして挟んだペニスの先端を舐めた。

「お兄ちゃん、ああ、今夜は素敵な夜にしたいんです。だからお願い、いっぱい興奮してください……れろっ、ちゅばちゅぱっ」

「うあっ、愛御まで、挟んだまま舐めて、ううっ……！」

愛御も同じく覗きこんで、舌を小刻みに這わせてくる。快楽の度合いがまた一つ上がり、急激に熱感がこみ上げてくる。

巨乳爆乳な妹たちによる、まさかのダブルパイズリフェラ。その押し包むような四重快楽に、満臣はいよいよ腰を跳ねさせてよがり始めた。

「はあはあ、すごいつ、舌とおっぱいで一緒になんてえ……ああまずい、これじゃ……！」

快感に背筋がわななき、熱い塊がぐんぐん先へと上がってくる。おっぱいにしごかれるサオが震え、舌にしゃぶられる亀頭が膨らみ、尿道がじゅくじゅくと甘く痺れて解放の瞬間が近付いてくる。意識もウツトリと蕩け始めて、我慢はもはや風前の灯状態だった。

「んんっ、じゅるるるっ……ああはあ、すごい、カウパーいっぱい出てきてるう。おにいに、出ちやいそうなんだね？ 分かるよ、すっごくいやらしー顔してるもん……！」



「あたしも大好きっ。おにいの味、おちんちんの味、好きいっ……あむっ、ぢゆるるっ！」
心も身体も堪らなくなつて、命は夢中でペニスをしやぶつていた。

（美味しい、ちよつとニガいのも、好きいっ……あはあ、おツユの味も最高うっ……！）
唇でエラをぬふぬふとしごくつと、カリがぐつと硬くなつて鈴口から汁が溢れ出てくる。
少し酸っぱいその汁を啜つて割れ目に舌先をちゅくつと入れると、サオの部分がびくつと膨れて気持ちよさげに血管が脈打つ。

そんな反応すら快く思えて、命は首を伸ばしてしきりに口内へと招き入れる。

「あぁいい、命の唇、柔らかくつてすごく気持ちいいよっ！」

「ふーっふーっ、おにひい、う、うれひ——んむうらんっ！」

——じゆるるるるっ！ ぴちやぴちやぴちやぴちやっ！

兄は両手で太腿を抱え込み、舌を押しこまんとする勢い。その熱烈なプッシュと入念なクン

まるで布を突き破つて、舌を押しこまんとする勢い。その熱烈なプッシュと入念なクン
二に下腹がじんじんと甘く痺れ、急激に子宮がわなないてくる。

命は青い目に涙を浮かせ、目いっぱい首を伸ばしペニスを飲み込んだ。

「んむうっ！ おにひい、むぐっ、ふごいい、ほまんふおはんじるう——んぐ、んぐぐっ！」

「おおっ、命、そんな奥まで啜えこんでっ！ 喉に当たつて、すごい感じるうっ！」

兄の腰が、切羽詰まったようにびくびくと震えてきた。

どうやら喉に触れる感触がとても気持ちいいらしい。

そうと分かった命は、息苦しいのも構わずに思い切り喉奥まで飲み込んだ。

「おおおっ！ すごい、喉で締めつけてえっ！ 命、命おっ！」

「むぐぐっ、おにひいつ、んぐっ、んむうううんっ！」

快感に悶え始めた兄は、ついに自ら腰を振って濡れた口内を突いてきた。同時に舌をぐつと突き出し、シヨーツの布を押しこむようにしてトロトロのおま○こをほじくってくる。

その苦しくも甘美な強い刺激に、命はどうとう背筋を波打たせよがっていった。

「んむうっ、じゆる、ずるるっ！ おにひ、おにひいつ……ひもひ、ひもひいいよおっ！」

（だめ、意識とんじゃう！ 息辛いのに、喉苦しいのに、すごくいよいよ！ おちんちん美味しい、びくんびくん素敵、舌も入ってきて、おま○こ、クリちゃんがあ——！）

豊満な乳房もぶるんぶるん揺すって命は快楽に身悶える。すでに淫核は勃起していて、クロツチに擦れて甘強い媚電びでんを味わっている。兄の舌がピストンするたび、それはどんどん強くなって官能に腰が跳ね回る。

気づけば口内もドロドロになって、じゅぶじゅぶとサオをしごく唇から唾液が溢れ出していた。

そんな自分を恥ずかしく思うも、もう昂った肢体は止まらない。愛する兄との淫らな一時に、羞恥も密かな劣等感も甘やかに押し流されていった。

（おにい、好き、大好きっ！ ありのままを受け止めてくれるおにい、あたしの弱いところ分かってくれるおにい、そんなおにいを、あたし愛してるっ！）

シーツをぎゅっと握りながら、命は改めて思う。自分はこの人しかない。優しくて温かくて、ときに強くて男らしい兄を、心から愛している。

もう怯えなくていい。思い切り胸に飛び込んで、笑顔でこの人の子を産もう。そう思つて、命はラビアをヒクつかせつつ、頬張つた。ペニスを唇を窄めて強くしごいた。

「おにひ、あいひれる——むぐっ、ぢゅずるるるるっ！」

「くううっ！ も、もうだめだ、命おっ！」

——どきゆるるるるうううっ！

兄が背筋を仰げ反らせた途端、喉に触れるカリの先から一気に粘液が撒き散らされた。

ちようどカリが喉を塞ぐ形だったため、粘液は口ではなく、喉に直接飛び込んでくる。

命は一瞬、強く咽せそうになった。気管支に入りそうになり、生理反応で肋骨が震える。

それでも、愛する兄のものを吐き出したくなくて、懸命にこらえながら喉を鳴らして飲み干していった。

「んぐ、ゴクッ、ゴクッ、ゴクッ……！」

（セーエキ、美味しい……おにいのだもん、美味しいに決まつてる……やだ、こんなことでも感じちゃつてえ……！）

——びくっ、びくっ、びくっ……

クロツチの奥のびしよ濡れのおま○こが、興奮のあまり勝手にイってしまつていた。

「はあ、はあ……命、精液飲んじやつて……それに、おま○こもイって……？」

兄は驚いた様子で、そつと身体を起こし、口からペニスを抜いてくれる。

「苦しかったろ？ 大丈夫か？ そんな無理して」

「はあ、はあ……平気、だよ。だって……おにいのだもん」

優しく抱き起こしてもらいつつ、呼吸を整えて命は言う。

「……美味しかったよ？ ごちそうさま……てへっ」

命はまっ赤になった顔に、精一杯の明るい笑みを浮かべた。

そう、これが自分だ。いつも笑って走り回って、大好きな兄の胸に一直線にダイブしていく。そして思い切り甘えながら、愛する兄に抱かれて子を宿すのだ。

どこか吹っ切れたような心地で、命はブラのリボンを解き、ショーツをずらしておねだりした。

「おにい……ちようだい。今度はコッチに……おま〇こに、いっぱい飲ませてほしいな」
散々舐められたおかげで、細いピンクの縦割れは、すでに大洪水となっていた。ぷるんとカップからこぼれた乳房も、まるで口づけを求めるように先端をピンと尖らせていた。

「命……うん。お兄ちゃんも、命の中に入りたい」

「くすつ、だよねー？ おちんちん、まだびんびんだもん」

本当はまだ恥ずかしかったが、あえてべろつと舌を出す。

そんな本心を察してくれるのか、兄も笑ってにじり寄ると、妹の身体を少し傾け、左足だけをあげさせる。

その足を抱え込むようにすると、兄は松葉崩しの形でゆっくりとペニスを挿入してきた。「ああっ！ おにい、すごいっ……おちんちん、硬いよお……！」

強い官能が膣肉を駆け抜け、命は甘い声を漏らした。

（やだ、これ、ほんといいっ！ 入っただけでじんじんしちゃって、おま○このお肉、悦んじやうっ！）

半ばまで入っただけだというのに、もう膣肉が甘やかに痺れ、悦びにきゅうつと柔らかく締まる。

正直、驚きだった。先日は入れた直後は、確かに強い痛みがあったのだ。最後はちゃんといけたとはいえ、ロストバージョンした実感はあった。

なのに今は、ほんの少しも痛くない。狭い膣洞を埋められた感覚は蕩けそうなほど甘美なもので、すぐにも粒ヒダ全体がわななき情熱のピストンを欲しがり始める。

「はあ、はあ、おにい、あたしっ、変だよおっ……もう、イっちゃいそうなくらいキモチいいよお……ああけど、おま○こウズウズして、こ、腰が……」

腰が自然とくねってしまっただけでいやらしい動きをしていた。なんだかとても恥ずかしく思えて、命は思わず人差し指を噛む。

その仕草を見た兄は、再び興奮の面持ちになって、

「命、もう腰が動いてるね。ほんとに感じてるんだ。いいよ、もっと感じて。感じてるとこ見せて」

「んあつ！ だつ、だめえおにいっ、そんな深いトコ……あんつ、こつこつしちやあつ！」
命は堪らず背筋を仰け反らせ、官能の悲鳴をあげてしまっていた。

再び火がついてきたのだろう。兄の勃起はズンと奥まで入ってきて、粒ヒダを鋭く捲ってきた。

さらには腰を密着させると、深い部分を小刻みに突いてそこを重点的に責めてくる。これがまた驚くくらいに気持ちよくて、弾けるような鋭い快感が腰全体に一気に広がり、

「あつあつ、ああつ、おにいだめ、それっ、らめええ——っ！」

——びくびくっ、ぷしゃああつ！

ロクに動いていないというのに、命はラビアから潮を噴いてイってしまった。

「はあつはあつ、そんなあ、あたしっ、もう、イツちやつてええっ……！」

信じられなかった。最初はあんなに苦しんだのに、わずか二度目でこうも簡単にイクようになるなんて。おまけに潮まで噴くなんて、まったく初めての経験だった。

「すごい、命も敏感なんだね。ちよつと突いただけでイクちやうなんて」

あるいは松葉崩しの体位が、より刺激を強くしたのかもしれない。普通とは違う角度で擦れるので、新鮮な刺激が得られるのだ。

それでも命は強く羞恥し、涙まみれで思わず睨む。

「はあ、はあ、うう、おにいのばかあつ。だめっていったのに……」

いくら愛する兄相手でも、潮を飛ばしてイク姿なんて恥ずかしくて見られたくない。好

きだからこそ、異性として意識するからこそだ。

けれど兄は、嬉しそうに微笑みながら、今度はより強く奥をかき混ぜ始めた。

「ごめん、でも可愛いよ命。お兄ちゃんどきどきする。だからもつとイって、もつとエツチなとこ見せて！」

「ひゃあそんなあ、あつ！ あつあつあつあつ！ ひあだめおにい、奥弱いのお、ひゃうんそこらめええつ！」

——じゅぷっじゅぷっじゅぷっじゅぷっ、こつこつこつこつこつこつ。

奥をしつこくノックされて、命は快楽に乱れよがった。鋭い甘美感がまた津波のように押し寄せてきて、膣内と子宮を渦のように駆け回る。まるで胎内が激しく熱せられ、甘やかに溶けていくようだった。

その強い快楽に怖れすら覚えて命は腰を引こうとするが、兄の両手があげた左足をがちりと抱いて離さない。

それどころか、兄は覗きこむようにして、むき出しの乳房に吸い付いてきた。

「あつあああ——っ！ らめえおにいっ、あたし弱い、おっぱい弱いよお！」

「うん、だから吸いたいんだ。大きくなった命のおっぱい、お兄ちゃん好きだから……！」

「そんなあ、やだっ、嬉しいっ——あはあああ——っ！」

もう命は快楽に抗うなんて無理だった。前に知ったが、おっぱいで味わう兄のキスは本当に心地よくて堪らない。豊満で弱いGカップたちは、ピストンにあわせて柔らかに揺れ

ながら甘い媚電にたちまち震えた。

おかげでおま〇こは感度をさらに増し、タップリと濡れたぷりぷりの粒ヒダを深くカリに吸い付かせる。その甘美な刺激に肉棒が悦び、一気に加速をされると、より一層の激しい官能が腰骨さえをも焼いてきた。

「だめえつ、だめおにいっ！ あたし弱い、おっぱいっ、おま〇この奥うっ！ こんな
のらめえ、溶けちゃう、おっぱいもおま〇こも蕩けちゃううっ！」

「いいよ命、蕩けちゃっても！ お兄ちゃんも蕩ける、ヒダヒダ絡んですごくいい、くう、
もう、もうすぐっ……！」

「ああまた硬くうっ！ おちんちんらめえ、ぐいぐい反って、ああんらめえっ！」

すでに全身汗だくでまっ赤、青い瞳を涙で光らせエゼエと喘ぎまくるばかり。乳首は乳輪ごとぷっくりと膨らみ、兄の唇に悦んで吸われる。あげた左足もガクガクさせて、迫り来る絶頂にわななく命。

その元気に弾むヒップを掴み、兄もまた快楽に顔をしかめる。

「はあはあ、命、もう限界だっ……出していい？ 命のおま〇こに、また中につ……！」

「はあつはあつ、ナカ、ああナカああ……！」

涙で霞む目で兄を見て、命は恍惚に打ち震えた。

彼もまた、膣内射精による種付けの興奮を求めているのだろう。普段優しげな目は、今
は欲情で燃えるように輝いている。

おにいの本氣の目、すごいどきどきするっ——鳥肌が立つような愉悅にわななき、命は全力で左足をあげていた。

「はあはあっ、お願いおにい、ちようだい、赤ちゃんちよおだいっ！ デキたいの、おにいの赤ちゃん、子宮にデキたいいっ！」

——きゆううっ、きゆうむっ、きゆうむんっ！

今にも潮を噴きそうなるラビアが、本氣の意思を示すように入り口を目いっぱい締めつけていた。存分に擦られて蕩けた粒ヒダも、熱い子種に飢えたように敏感なエラ裏をねつとりと搾り上げる。

途端に満臣はくっと呼いて身体を丸め、

「命っ、出るよおっ！ お兄ちゃんの精子、命の中にいっ！」

「きてえっ、いっばい、おにいのセーキいっ——あっ、あああ——っ！」

——どくうっ！ どくっ、どくどくどくどくううっ！

狭い膣の深い部分で、大量の粘液が噴射するように撒き散らされた。

その熱くて激しい焼けるような甘美な感覚に、命は堪らずおとがいを反らして果てる。

（すごいっ！ これっ、ほんとキモチいいよお！ 熱いのどくんどくんきて、子宮目がけてびちゃっびちゃってえ……やだっ、あたしおにいとの子作り大好きになっちゃうっ！）

経験したことがない、目も眩むような絶頂感だった。目の奥がチカチカと明滅し、身体全体の筋肉が強張り、途方もない到達感が子宮いっばいに広がる。浮遊感も半端ではなく、



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 盗作リムをルルは、生満の方購入できずせん。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!